

特 100

220

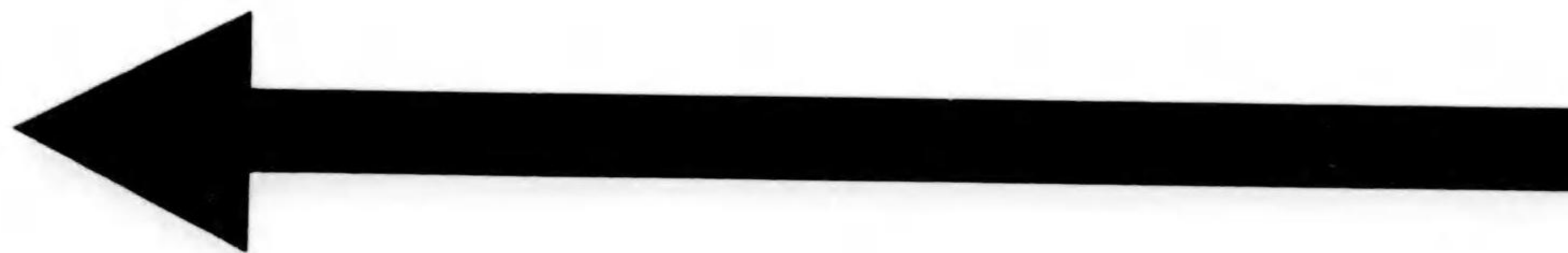
書叢ギカア

糸半

作ヒルベドシトス



始



持子100

220



新編第卅冊カギ書

絆

島田青峰譯
ストリンドベルヒ作

大正
3. 8. 14
内交



August Steinberg.

アカギ叢書發刊の辭

予往年將に中學を終へて、生涯を捧ぐべき職務を選定する必要に迫らるゝや
懊惱之を久らして遂に書籍出版業を得たり。即稍狂熱を有したる文筆の樂を棄
て、直に一書肆の丁稚となつて初めて轅を握るや、爾來葱忙の間に既に六星霜
を経たり。未だ何等の得る所無きを耻づと雖、當今所謂書籍界の狀勢を見、立
志以來の『書籍によりて享受し得べきあらゆる幸福は、必ず之を一般に普及せ
しめ度し』との信念に至りては、年を経て益々固きを覺ゆ。是予が菲才自ら顧
みず大正三年元旦を期し、書籍出版業として微を此處に致すべく立ちたる所以
也。

當今書籍出版業たる予の最も痛恨に堪えざるものあり。古今東西の科學、藝
文にして、誠に珍重すべき内容を有し乍ら、吾國に於る普及の程度眞に微少を
極めたるもの之なりとす。原因とすべきもの多々ありと雖、書籍の價高きに過

ぐる一也。内容難澁を極めたる一也。尨大なるが爲に繁忙の今日、止むを得ず閑却せざるを得ざるもの一也。先づ第一着手として今日アカギ叢書を刊行するに至りたるは、誠に此處に見る所あれば也。即アカギ叢書は各冊を全部金十錢にて提供す。外國語、古代語は、全部通俗にして度に適せる現代語に翻譯す。如何に尨大なる内容をも、妙味を失はざる限り、必ず袖珍百頁にコンデンスす。依つて以て従來専門家、篤學者のみの專賣に委したる宇宙の眞理、學術の寶庫の、高價、尨大、難澁の三大門戸を開放して、あらゆる人士の活用に供せんとす。未だ善美を盡さずと雖、予が事業の第一聲としては私に誇りとする所也。希くは大方の諸賢、幸ひに善導を賜へ。

(2)

大正三年三月

赤城正藏白

はしがき

一、ストリンドベルヒと言へば直ぐイブセンの名が聯想されるし、イブセンと言へばやがてストリンドベルヒの名が浮かんで来る。近代劇に於ける二人の大立者は時を同じうし、國を隣して北歐の空に燦として輝いたのであつた。

一、近代劇の開祖とまで崇められるイブセンの劇は舞臺的効果の盛んな點に於いて獨歩して居る。之れに比べると、ストリンドベルヒは、どちらかと言へば舞臺的效果に於いて稍々劣るやうにも思はれる。けれども人間心理の秘奥に探り入つて容赦なく鋭利なる解剖の匕首をひらめかすといふやうな點に至つては、おさく／＼イブセンを凌駕して居ると思ふ。

一、フェミニストだと言はれるイブセンに對して、ストリンドベルヒは徹頭徹尾アンチフェミニストだと言へる。従つて女性に對する辛辣なる皮肉嘲罵罵正

に面を向けんやうも無いほどである。

一、こゝに譯出した「絆」(英譯名「The Link」)といふ一幕物の悲劇は男爵夫妻の離婚裁判を描寫したものである。絆といふ意味は丁度日本の諺にいふ「子は銕かすがひ」といふのと略々同じやうな意味合を持つて居る。ストリンドベルヒが三度結婚して三度離婚したといふ苦にがい經驗を賞なめた人であるだけに、譯者は殊にこの劇に興味の豊かなるべきを思ふのである。

一、この劇は西曆紀元一千八百九十七年、ストリンドベルヒが四十八歳の時の作である。

一、語學の力の乏しい譯者は止むを得ず之れをエドウィン・ピョルクマンの英譯から重譯した。それとても或は誤謬を期し難い。大方の示教を得ば幸甚である。

大正三年夏七月

譯者 識

絆

ストリンドベルヒ作

島田青峰譯

人 物

判事(二十七歳)

牧師(六十歳)

男爵(四十二歳)

男爵夫人(四十歳)

アレキサンデル・エクルンド

エムマニユエル・ウイツクベルヒ

カルル・ヨハン・シヨーベルヒ

エリック・オットー・ボーマン
 アイレンフリッド・ソーデルベルヒ
 ウイツクのオロフ・アンドルツソン
 ベルガのカルル・ペテル・アンドルツソン
 アクセル・ワルリン
 アンデルス・エリック・ルース
 スウエン・オスカル・エルリン
 アウグスト・アレキサンデル・ヴァス
 ルードウィツヒ・オストマン

陪席判事

裁判所書記

執行官

巡查

辯護士

アレキサンデルツソン(農夫)

アルマ・ジョンソン(下婢)

乳搾りの女

日傭人

傍聴人

法廷。背後に扉と窓。窓からは教會の庭と鐘樓とが見える。右手に扉。左手
 小高い所に裁判官のデスク。デスクの前側には、裁判の標章である劔と秤
 とが金で飾り付けてある。デスクの両側には十二人の陪席判事の椅子と小
 卓とが置いてある。室の中央には傍聴人のベンチ。室の両側には壁に作り
 つけの戸棚がある。其の扉には法廷の告示や取引税の表が貼付けてある。

第一場

執行官と警官。

執行官。 夏季の裁判期間に、こんなに澤山の人が集まつたところがあるだらうか？
 巡査。 十五年來無いことですか。あのアルダー・レークでの虐殺事件以來の事
 ですか。

執行官。 左様、でこの一件は二重の親殺しと言つても好いやうなものさ。男
 爵と男爵夫人が別れようとして居ることは随分面目次第も無い事だが、かて
 へ加へて一家の者が土地財産を奪ひ合つて居るに至つては、もう切迫つまつ
 て居ると見て取るのは容易な事だ。唯今までのところ一つ缺けて居る事は子
 供の取合ひつこといふことだが、いよくさうなれば、ソロモン王でも何が
 正しいんだか判断のつくものぢやない。

巡査。 一體この事件の背後にはどんな事があるのでせう？ あれか、これか
 と言ふものもあるが、兎に角罪は誰かに落ちなければならぬ筈ですね。

執行官。 其の事は私には分からない。二人の人が喧嘩をする時に、どうかす
 ると其れがどちらの過失でも無いことがあるし、又一方のみが悪いこともあ
 る。まあ噺に宅の老妻を御覽。あれは私の留守の時には、勿體ない、家中騒
 げずり廻はつて怒鳴り通しだと言ふぢやありませんか。これは喧嘩と言ふの
 ぢや無いが、それでも十分犯罪を構成して居る。そして斯ういふ場合多くは
 一方が原告即ち害を受けた方で、他の一方が被告即ち罪を犯した方といふこ
 とになる。けれども今度の事件は、両方が同時に原告でもあり被告でもある
 から、誰が悪いのか一寸見分けることが容易ぢや無い。

巡査。 さうですとも。近頃は不思議な事が出来します。女といふものは
 氣が違つたのぢやないかと思はれる位です。宅の老妻が、『もし物事に正義と

いふものがあつたら、お前さんも子供を拵へなきやならない筈だ』と、かう言ひます時には魔力を持つて居るやうであります——丁度神様が如何して萬物を創造なさつたか、御存じて無いと同じやうであります。さういふ時には、私はさも／＼何にも知らなかつたといふ風に、又反對の事を言つたことの無いやうな鹽梅に、お前さんも人間ぢやないか、お前さんは俺の召使女として働くのが厭やになつたんだらうと言ふやうな他愛も無い雑談をくどくどと言つてやります。事實私はあれの雇人も同然なのであります。

執行官。ふむ。ぢやあお前さん許でもそんな崇りがあつたんだね。宅のは莊園地で買つて來た新聞を讀んで、そして或時は、百姓の小娘が左官に爲つたなどと言ふかと思ふと、翌日は年老つた女が病人の夫をぶちのめしたなどと、不思議さうに私に話をする。私にはどういふ理由だか一向腑に落ちないので、これや大方私が男だからといふので、あれが氣をいらだゝせて居るのら

しい。

巡查。奇妙きで、れつですな、それや其の通りでせう。(嗅煙草を差出して) 好い天氣ですな。裸麥は狐皮の毛のやうに厚く實つて居ります。害になる霜も無事で済みました。

執行官。私の方は何もかも不作で、豊年は私には凶年で、死刑も無ければ公賣處分も無い。君は今日の法廷の係りの新しい裁判官の事を何か知つてゐるかね？

巡查。よくは知りません。けれども若くつて、まだ役人になりたてで、今度初めて裁判をするのだといふことだけ知つてゐます——

執行官。彼れは信仰家だといふことだ。ふん！

巡查。はゝあ！ それで今年の教會のお勤めは皆恐ろしく時間がかゝる。

執行官。(裁判官のデスクの上へ大きな聖書を置き、陪席判事等の小卓へそれ

「く小さい聖書を置く」もうぢきに済むだらう。やがて一時間にもなるから。巡查。彼れの説教は素張らしいものだ、牧師と言つて可い、前にはやつてゐたと言ふことです。(間)原告被告双方とも出頭するのでせうか?

執行官。双方とも来る、だから多分喧嘩が始まるだらう——(鐘樓の鐘が鳴り始める)そら、今済んだ——さあテーブルを拭いて、これで何時始まつても用意が出来てると言ふもんだ。

巡查。インキは皆這入つてゐますかね?

第二場

男爵及び男爵夫人登場。

男爵。(小聲で夫人に)では二人が一年の間別れる前に、すつかり萬事を取り

きめて置かう。第一に法廷で反訴をしない事。可いかい?

夫人。あなたは私が、このへんちきりんな百姓達の前で、私共の共同生活の込み入つたいきさつを、さらけ出してすふだらうとお思ひですか?

男爵。その方が好いだらうよ! それから私が子供に會ひたいと思ふ時には子供を寄越すやうにし、又私が工夫して、おまへが賛成してくれた方針で子供を教育してくれるなら、別れて居る間おまへが子供を引取つてくれては如何だね?

夫人。宜しうございます!

男爵。それから、土地からあがる収入の中から、別れて居る間三千クラウンを

おまへに上げよう?

夫人。承知しました。

男爵。これでもう何も言ふことは無い、唯お別れの挨拶だけすれば好いのだ。

別れる理由は唯おまへと私が知つてゐるだけだ。私達の子供の爲めを思へば他人に知らせてはならない。が又た子供の爲めにおまへに願ひして置きたいことは、どうぞ争論いさかひをやり出さないやうにして貰ひたい、あの子の兩親の名を汚すことになるからね。どうしたつて、此の世では残酷ながら、私達の離縁のお蔭であれを苦しめることになるといふことは殆ど分かりきつてゐるんだ。

夫人。 私が子供を引取る以上は何事も言ひ出さうとは思ひません。

男爵。 では子供の幸福といふことに一心に氣をつけて、二人の間に起つた事を忘れるやうにしようよ。そして今一つかういふ事を思つてごらん。私達が子供を奪ひ合つて、やれおれの方があれを育てるのに適任だ、いやおれの方だ、といふやうな問題になると、裁判官は我々兩人からあれを引離して了つて、信心深い人に預けて了ふかも知れない、さうなると其の人は、兩親を憎

み蔑むやうに子供を教育してしまふだらうからね。

夫人。 そんなことがあるのですか！

男爵。 法律といふものは、おまへ、さうしたもんだよ。

夫人。 それは愚にもつかぬ法律です。

男爵。 さうかも知れない、けれどもそれが行はれて居る。他人に對してもおまへに對しても同様に。

夫人。 それや無理です！ どうして私はそんなものに服従するもんぢや無い。

男爵。 そんな事を言つちやいけない、もうお互に言ひ合はないやうに定めたんぢやないか。私達は以前にはどうしても意見が合はなかつた、が此の點だけは全く一致したんぢやないか、何等の敵意なく別れるといふ事は？ (執行官に) 妻は向ふのあの室で待つて居ても好いでせうか？

執行官。 宜しいとも、ずつと眞直に御出でなさい。

男爵は左手の扉の所まで夫人を連れて行つて、それから自分は背後の扉から立ち去る。

第三場

執行官、巡査、辯護士、アルマ・ジョンソン、
乳搾りの女、日傭人。

辯護士。(アルマ・ジョンソンに) おい、おまへさんが物を盗んだといふことは、私は少しも疑つてはゐないよ、おまへの主人はその證據を持つてゐないだらう。おまへには罪が無い。併しおまへの主人は、二人の證人の前で
おまへを泥坊だと言つたのだから、誣告罪に問はれるんだ。そこでおまへが

原告で、主人が被告といふことになる。が、この一つの事、罪人の爲すべき第一の役目は——否といふことだ!——といふことを覺へてお置き。

アルマ・ジョンソン。だが、あなたさま、今あなたさまは私が罪人で無くつて、且那様がさうだと言はつしやつたぢやありませんか?

辯護士。おまへは泥坊をしたのだから罪人だ、がおまへは辯護士の所へ頼みに來たのであるから、おまへを無罪にして、おまへの主人を罪に落すのが私の明白な義務といふことになるんだ。だから、最後にもう一度言つて置くが、それ、否!——といふんだよ。(證人等に)そこで證人に關してであるが、果して彼等は何の證據を擧げようとしてゐるのであらう? よくお聞き、善き證人は當の事件を離れるもので無い。今お前さん方は、問題はアルマが果して物を盗んだか盗まないかといふことで無く、唯アレキサンデルツソンが、彼女が物を盗んだと言つたかどうかと言ふこと一あるといふことを記憶してゐ

なければならぬ。といふのは、よくお聞き、彼れは彼れの言ひ分を證據だ
 てる権利が無い、然るに我々にはそれがある。何故さうであるかといふに、
 それは唯神さまが之を知つて居られるばかりだ！ 併しそれは我々の關する
 ところでは無い。だからおまへさん方は舌を眞直まっすぐにして、指を聖書の上に載
 せてちつとしてゐればそれでよろしい！

搾乳りの女。 わしはア、おつたまげて、何言ふてよかんべか知りましねえだ！
 日傭人。 わしが言ふ通りに言はつしやい、すりや、嘘言ふとになんねえだに。

第四場

判事及び牧師登場。

判事。 お説教に對してお禮を申し上げます。

牧師。 お、どうも、それには及びません。

判事。 ですが、御存じの通り、これが私の初めての裁判なものですから。實を
 申すと、私はこの任務に恐れを抱いて居りましたのですが、殆ど私の意志に反
 してそれにはふり込まれてしまつたのです。恐れといふのは謂はゞ此の一つ
 の事、まあどうしたら裁判官なるものが、一應確固とした意見を發表するこ
 とが出来るとだらうかと幾度も不思議に思つたほど、法律なるものは不完全
 なものであり、法の運用は不確なものであり、又た人心は虚偽黠詐あつちやうに満ちて
 居るといふ事、これでありませう。然るに今日貴僧おなたはあらゆる私の古い恐怖を
 呼び醒まして下さつた。

牧師。 勿論良心に従ふといふことが本務であります、その事を氣にしすぎ
 るのは好くありません。この地上にあるものは皆不完全なのであるから、我

々が裁判官並びに裁判に完全といふことを期待する理由は毫もありません。判事。さうかも知れませんが、けれども私は、人の運命を掌中に握つて居て、私の一言が幾代の後々までも其の結果を残して行くかも知れないといふことを思ふと、莫大もない責任の感を抱かずには居られません。私は、男爵及び其の夫人によつて提起された離婚裁判に就いて殊更頭を痛めて居ります。それで私は貴僧——教區委員會で二つの命令的忠告を與へて下さつた貴僧——にお伺ひしたいのですか、この二人のお互ひの関係及びお互の罪に關しては、如何いふ御意見でありますか？

牧師。言葉を換えて申すと、あなたは、私をあなた御自身の位置にお置きになるといふのか、又は私の證言を基もとにしてあなたの判決をお立てになるのか、どちらかです。ところが私の力に出来ることと言へば、委員會の記録を御参考なさいといふぐらゐのものであります。

判事。なるほど、記録——それは存じて居ります。けれども生憎私が知りた

いと思ふことは其の記録には見えてゐないことなのです。

牧師、ひそかに私の所へ訴へ出た折に、この夫婦がお互にどんな非難を言ひ合つたかといふことは、私の胸へ収めて置かなければならないことなのです。その上誰が本當の事を言つた、誰が嘘を吐いた、といふことが如何して私に分かりませう？ 私があの二人に言つたことをそつくりあなたにも言はねばなりません、即ち一方を他方に増して信用して然るべきだといふ理由は少しもござりません。

判事。けれども其の場合、あなたは事件に對して何等かの御意見を御考へになられたらうと思ひますが！

牧師。一方の言ふことを聽いてゐる時は或る意見が浮びましたが、又片一方の言ふことを聽くと又違つた意見になりました。一口に申すと、私はこの間

題には定まつた考を持つてゐないのです。

判事。併し私は確定した意見を發表しなければならぬ——何事も全く承知してゐない其の私が。

牧師。それこそ私なんぞには及びもつかぬ、裁判官なるものゝ重い任務であります。

判事。が審問すべき證人はあるのでせう？ 證據も得られることとせう？

牧師。いゝえそれが無いのです、彼等は表向きは互に誰れを罪しようとしてゐない。その上眞實ほんとうのでない二人の證人が十分の證據を提供するでせう、又一人の偽證者も同じくさうすることとせう。あなたは私が、召使の無駄口や、嫉み深い近所の口善悪くちまがないおしやべりや、或ひは又親類の怨みがましい仲間根性やなぞに據つて、私の判断を下すだらうとお思ひになりますか？

判事。牧師さん、あなたはひどい懷疑家であらうとつしやる。

牧師。人は六十を越すと得てしてさうなる、殊に四十年も人のお守をして來ますとね。嘘をつく習慣は丁度原罪オリジナルシンのやうにくつ着いてゐて離れない、私は人といふものは皆嘘みんなをつくものだと思つて居ります。子供の時には恐怖から嘘を言ひ、大きくなつてからは利害や必要や自己保存の本能から嘘をつく、それから私は、全く深切心から嘘をついた人も知つて居ります。此の事件では、この夫婦に關するだけでは、誰が眞實の事を餘計に言つたか、それを確かめることもあなたには困難だらうとお察して居ります。それで私の力で出来ることと言へば、成心といふものによつて仕掛けられた係蹄わなにかゝらないやう、あなたに御注意する位のものであります。あなたは結婚後未だ間も無いことだし、未だ若い婦人の魔力に支配され易い。だからあなたは、不幸な妻であり又母である、若い美しい婦人の方に偏頗になり勝ちであらうとも思はれる。又纏つて考へて見ると、あなたは又近頃お父さんになられた、そこで父

といふ點からして、あなたは今其の子に別れなければならぬといふ其の父なる人の切迫した境遇に動かされずに居られよう筈が無い。どちらの側へも同情を持つやうに御注意なさいませ、一方へのみ同情するといふことは片一方へは無慈悲な所業になりますから。

判事。 少くとも或一事が私の任務をずつと容易なものにしてくれるでせう、それは彼等が肝腎な點で相互に一致してくれるといふ事です。

牧師。 それを頼りにしてはいけません、彼等の言つて居ることは皆みんなそれなのです。彼等が法廷へ出るとなると、燻つてゐた火がばつと煽となつて燃え上る。この場合、ほんの小ほけな火花も大火事をしてかすに何の造作もありません。あゝ陪席判事方がやつて來られた。では暫時の間御免を！ 私は見えなくつても、こゝに残つて居りますから。

第五場

十二人の陪席判事登場。執行官は背後の開いてゐる扉口からベルを鳴らす。法廷の諸員おの／＼着席。傍聽人はどさ／＼と入つて來る。

判事。 法廷に於いて維持さるべき安寧秩序に關し、刑法第十一條、第五、第六、及び第八項の條文に照して、本職はこゝに審問の開始を宣告する。(裁判書記に囁いて、それから) 新任陪席判事諸君はどうぞ宣誓をして下さい。

陪席判事一同。(立ち上り、各自その前にある聖書に片手の指を置き、各自の名を讀み上げる時の外は皆一齊に聲を揃へて言ふ。)

アレキサンデル・エクルンド。

て宣誓致します。私はあらゆる場合に於いて、貧富のけじめ無く、私の最善の理性と良心とに従つて正しく判断し、神の法、國の法、まつた成文法に従つて裁決するでありませう、又さうしなければなりません。(一段調子を高め聲を張り上げて) 血族關係、婚姻關係、友誼、嫉妬、惡意又は恐怖等の爲めにも、又如何なる形式に於ける賄賂、贈品、其他の原因の爲めにも、苟且かりそめにも法を亂し罪惡を助長せしむるやうのことは爲ないであります。又罪無き者を責め、罪ある者を赦すが如きことは爲ないであります。(更に聲を張り上げて) 裁判の前後に於いても、又は法廷に立つ原被兩造に向つても、又は他人に向つても、私は閉ざされた扉の背後に於いて爲さるゝ評議を漏洩する如きことは決してありません。以上皆私は僞るところ無く謀るところ無く、正直眞率なる裁判官として忠實に守るであります。又守らなければなりません。(間) どうぞ神様、私の生命と靈魂たましひとを助け給へ! (陪席判事一同

エムマニユエル・ウイツクベルヒ。
カルル・ヨハン・シヨールベルヒ。
エリツク・オットー・ポーマン。
アーレンフリツド・ソーデルベルヒ。
ウイツクのオロフ・アンデルツソン、
ベルガのカルル・ペテル・アンデルツソン。
アクセル・ワルリン。
アンデルス・エリツク・ルース。
スウェン・オスカル・エルリン。
アウグスト・アレキサンデル・ヴァス。
ルドウイツヒ・オストマン。

(皆一齊に拍子を揃へ、低い聲、低い調子で言ふ) 神及び神の聖なる福音ゴスペルかけ

着席。

判事。(執行官に)農夫アレキサンデルツソン對アルマ・ジョンソン事件の關係者を召喚しなさい。

第六場

辯護士、アレキサンデルツソン、アルマ・ジョンソン、乳搾りの女、日傭人、登場。

執行官。(呼び出す)下婢アルマ・ジョンソンと農夫アレキサンデルツソン。

辯護士。私は原告の爲めに辯護の勞を取りたいと思ひます。

判事。(委任狀を調べて然る後)下婢アルマ・ジョンソンは、刑法第十六條第

八項に照して、六ヶ月以下の禁錮若しくは罰金に該當するものとして、元雇主アレキサンデルツソンに對して交付された令狀を持つて居る。其の理由はアレキサンデルツソンが何等告訴の手續をもなすことなくして、彼女を泥坊と言つたからだと言ふことである。アレキサンデルツソン、其の方の言ひ分はどうか?

アレキサンデルツソン。私はあれが泥坊してゐるところを捉まへましたから

泥坊と言つたのでござります。

判事。彼女が盗みをしたと言ふ證人があるか?

アレキサンデルツソン。いえ。あるといふのですが、ござりません、私は大

方獨りで出かけますので。

判事。何故訴へ出なかつたのか?

アレキサンデルツソン。えゝ、私は法廷へ出るのが嫌ひで。それに私共雇

主の仲間では内々での泥坊は告訴しない習慣になつて居ります、一つは泥坊が随分と多うございますのと、一つは召使どもの將來を打壊して了ふのも好みませんので。

判事。アルマ・ジョンソン、これに對する其の方の返答はどうだ？

アルマ・ジョンソン。へ、へい——

辯護士。黙まつておいて！ 此の事件の被告では無くつて、原告であるアルマ・ジョンソンは、アレキサンデルツソンに加へられたる侮辱を證明する爲めに、彼女の證人の取調を求めます。

判事。アレキサンデルツソンは誣告罪を犯したに相違ないによつて本職は證人の審問は行はない。之れに反して、アルマ・ジョンソンが上に擧げた罪を犯せしや否やといふとを知ることが本職にとつては甚だ肝要である、若しアレキサンデルツソンの發言に當然の理由ありとすれば、宣告に當つて情狀を酌

量して減刑さるゝことになるであらうと思ふ。

辯護士。私は今裁判長によつてなされた陳述に對しては異議を申立てねばなりません、如何となれば刑法第十六條第十三項によつて、誣告罪を以て告訴された者は其の中傷の眞實といふことに關して舉證の權利を奪はれて居るからであります。

判事。原告被告、證人、及び傍聽人は、この事件に就いて法廷の熟議を盡す間退場してよからう。

(裁判官の外すべて退場。)

第七場

裁判官等。

判事。アレキサンデルツソンは正直な信用の出来る男でせうか？

陪席判事一同。アレキサンデルツソンは信用の出来る男であります。

判事。アルマ・ジョンソンは正直な召使だといふ評判がありますか？

エリック・オットー・ポーマン。私は、去年ほんの小さな盗みをしたのでアル

マ・ジョンソンを解雇したのでした。

判事。それにも拘はらず私は今アレキサンデルツソンを科料に處さなければならん。どうも致し方が無い。あの男は貧乏ですか？

ルードウィツヒ・オストマン。彼は國税が滞納になつて居りますし、去年は大變不作でした。ですから罰金は背負ひ切れなだらうと思ひます。

判事。併し事件が極めて明白なのであるから延期する理由はとも見出せない。

そしてアレキサンデルツソンの方では何等證明すべを權利を持つて居らん。何か言ふべきこと、或は反對すべきことは無いですか？

アレキサンデル・エクルンド。私は全體に就いての考察を陳べさせて貰ひたいと思ひます。こゝに一方の泥坊その者は所謂名譽を回復することが出来たと云ふ場合に、他の一方では罪の無いといふばかりで無く、其の上に尙ほ損害を蒙つて居るといふやうな、斯かる事件がありとすれば、今後人民は其の仲間に対して次第に寛大の度を減じ、延いては訴訟事件が次第に益々普通の事となるやうな結果を容易に齎らすだらうと考へられます。

判事。全くさうかも知れない、けれども大體論は此の事件には何等考ふべき餘地が無い。法廷は決定を與へなければならん。そこで私が諸君に問ひたいといふ一事は、アレキサンデルツソンは刑法第十六條第十三項に照して有罪

とさるゝか如何かといふことであります。

陪席判事一同。有罪であります。

判事。(執行官に)原告、被告及び證人を喚び出しなさい。

第八場

皆々歸つて来る。

判事。農夫アレキサンデルツソンに對するアルマ・ジョンソンの訴訟事件は、誣告罪としてアレキサンデルツソンが一百クラウンの罰金を支拂ふべきものと宣告す。

アレキサンデルツソン。ですが、私がこの私の眼であいつの盜むところを見

たのでござります！——親切の報ひといふものはこんなものですか！

辯護士。(アルマ・ジョンソンに)言はないことぢや無い！ おまへがかぶりを振りさへすれば、皆ちやあんとなる。アレキサンデルツソンは馬鹿なまねをしたものだ。さうぢや無いと言ふことが言へなかつた。萬一私が彼の相談に預つて、彼が訴を否定したなら、私はおまへの證人に打つてかゝつたに違ひない、さうするとおまへはやられてゐたらうよ！——さあ出かけよう、そしてこの仕事の始末をつけて了まらう。

(アルマ・ジョンソン及び證人と共に退場。)

アレキサンデルツソン。(執行官に)では私は、アルマに紙を呉れてやつて、

それへあいつが正直で忠實だつたと書いてやつたやうなものですね？

執行官。それは私の知つたことぢやあない！

アレキサンデルツソン。(巡査に)こんな事で私は家も土地も棒に振つて了ふ

のです！ 正義といふことは泥坊には名譽といふ意味で、泥坊をされたものには折檻といふことになるなどは、誰が本當にするものか！ 畜生！——

オーマンさん、お出でよ、一杯やらう。

巡査。あゝ行くよ、だが騒いぢやいけない。

アレキサンデルツソン。よし／＼、かまうものか、三月ひどい目に會つたつて騒がずにやゐられねえや！

巡査。まあ／＼騒がずに——騒がずに！

第九場

暫くして男爵及び男爵夫人登場。

判事。(執行官に)マルムベルグ生れのスプレングル男爵及び其の妻に關する

離婚事件を開廷しませう。

執行官。マルムベルグ生れのスプレングル男爵及び其の妻に關する離婚事件。

男爵及び男爵夫人登場。

判事。スプレングル男爵が其の妻に對して取つた手續の中で、男爵は、婚姻を續けざるべき意向を宣言し、且つ教區委員會の忠告も無効に歸した故を以て、一年間寢室及び住居を別にせんことの命令の發せられんことを要求して居る。これに對してあなたは何か異議がありますか、男爵夫人？

男爵夫人。子供さへ私の方へ引取ることが出来れば、離婚には何の異議もございせん。

判事。法律は斯の如き事件に於いて毫も情狀酌量といふことを認めない。子供之處置を定めるのはこの法廷の爲すところであります。

男爵夫人。へえ、それは奇態ですねえ！

判事。其の故を以て、當法廷は、此の訴訟を爲すに至つた^{いさかひ}争論を惹起したのは何人であるが、それを明かにすることが最も重大な事だと考へる。教區委員會の附録覺書に依れば、妻は時々氣短な、片意地を示して居つたことを承認して居るやうに見えるが、夫^{おとこ}の方には過失を認めて居らん。斯やうの次第で男爵夫人、あなたも承認されたものやうに思はれるが――

男爵夫人。それは嘘です！

判事。本職は、牧師及び八名の他の信用すべき人々によつて連署された教區委員會の覺書が、不正確であらうと信ずることは困難だと思ひます。

男爵夫人。その報告は間違つてゐます！

判事。さやうの言葉は、この法廷に於いて聞き捨てには出来るものでない。男爵。私は、或る條件で進んで子供を男爵夫人に渡して了つた事實を申述べ

ても宜しいでせうか？

判事。本職は前に一言した事を今一度繰返さなければならん、即ちこの事件は法廷によつて、判決せらるゝもので、決してその事件の當事者によつては無いといふことである。それで、あなたは^{いさかひ}争論を惹起したといふことを否認しますか、男爵夫人！

男爵夫人。はい、否認致します！二人の人が^{いさかひ}争論をするのは、一人だけの罪ではございません。

判事。これは争論では無い、男爵夫人、訴訟事件であります。その上、あなたは今は、したくない振舞のみならず、まるで喧嘩腰のやうに見える。

男爵夫人。ではあなた^{おとこ}は夫を御存じぢやないのです。

判事。どうかあなたの説を聞かして貰ひたい、本職は、ほんの諷示などを基にして判断を下すことは出来ないのですから。

男爵。 それでは、私は他の方法で別れるやうにしたいと思ひますから、此の裁判を却下して下さいるやうにお願い致します。

判事。 既に事件が公判に付せられたる以上は、その結論まで到達しなければなりません——男爵夫人、ではあなたは、男爵がこの離反の原因だと主張なさる。その證據が挙げられますか？

男爵夫人。 え、證據を舉げることが出来ます。

判事。 ではどうぞやつて下さい、けれどもこれは男爵の親たる権利、及び財産に關する權利を剝奪する問題であるといふことを心に留めて置いて下さい。

男爵夫人。 夫は幾度も其の權利を沒收されました、その爲めに私は、睡眠も食事も取ることが出来なかつたやうなことも少くはないのです。

男爵。 私は、妻を眠らせなかつたといふやうなことは決してしたことが無い

と言はざるを得ませぬ。私は唯午後は眠らないやうにと言つただけです、といふのは、さうすると家の締りがつかず、子供をよく世話するものも無く打捨らかしになるからです。食物に就きましては、私はこんなことはいつても妻に任して置きました、唯私は贅澤な御馳走には反對しました、締りの付いてゐない家政では、そんな費用に堪えられませんからです。

男爵夫人。 それから私が病氣で寝てゐても醫師を迎えてくれませんでした。

男爵。 妻は自分の我儘が通せない時にはいつも病氣になりました、けれどもかうした病氣は定まつて永續きはしませんでした。町から醫師を連れて來て診察して貰ふと、これは假病だ、何でも無い、と見たてゝくれてからといふものは、其の次ぎ妻が病氣になつた時も醫師を呼び迎へる必要は無いと定めてしまひました——新しい大姿見鏡はもとく豫想したよりは五十クラウン安いといひますからね。

判。斯かることは皆、斯やうの重大な事件が裁決さるべき場合に考ふべき性質のものでは無い。他に更に深い動機があるに違ひない。

男爵夫人。父なるものが母なるものに其の子を養育することを許さないといふことは一の動機として數えなければなりません。

男爵。第一、妻は子供の世話を女中に任せて置きました、そして妻が手助けをしようとする、いつもうまく行きません。第二に、妻は息子を男子としてゝは無くして女子として育てようと思いました。例へて見ますと、子供が四才になるまで、女の子のやうな着物を着せて居ました、そして八才になつた今日までも、子供は娘の子のやうに髪を長く下^さげてゐます、それから縫物編物をさせられ、又人形をもつて遊んで居ります。こんな事は皆な、子供が一人前の男になる正當の發育に有害だと私は思つて居るのであります。これに反して、妻は小作人共の娘に男子のやうな装^{なり}をさせて、髪を短く斬つて、そし

て普通男の子がやるやうな仕事をさせて、そして自分で喜んで居るのであります。一口に申すと、私は、この以前刑法第十八條に抵觸したところある精神錯亂の徴候を認めましたから、息子の教育を引受けたのであります。

判事。それでゐて、あなたは今母の手に子供を任かさうとなさるのですか？

男爵。さうです、私は母と子とを分離すやうな残酷なことは思ひもかけなかつたのです——それに又母は自分のやり方を改めると約束したからであります。それで其の事に就いては唯條件付きで、又法律はこの事に關係があるまいと考へたので約束しました。然るに私達は反訴を避けることが出来ませんでしたから、私はすっかり考を變へました——殊に、原告の位置から被告に變へられてしまひましたから。

男爵夫人。これがいつも此の人の約束を守るといふ手なんです。——
男爵。私の約束は、他の人のと同様、いつも條件付です。それで其の條件が

履行される限り約束を守つて來ました。

男爵夫人。それと同じ手で、あの人は婚姻の範圍内に於いて私の一身上の自由を約束しました。

男爵。當然それは禮節の法則が破られないといふ條件でした。けれどもあらゆる限界を通り越して、放埒な考が自由の名の下に現はれた時、私は私の約束を無効だと見做しました。

男爵夫人。で此の理由で夫は馬鹿々々しい嫉妬を起こして私を苦しめました、それだけでも同様の堪えられなくなるのには大方十分でした。夫は醫師のこゝとて嫉妬するほど可笑しくなつてゐましたのです。

男爵。今申立てた嫉妬といふことは、普通は婦人が手にかけるやうなほんの病氣に、有名な又お喋舌の按摩を雇ふことに對して私の方でした忠告位に値下げして宜しいと思ひます——それで無ければ、妻が客間で喫煙の出来るや

う、葉巻煙草を渡す爲めに、私の執事を扉口のところまで遣はした時の事を氣に留めてゐるのでないかと思はれます。

男爵夫人。私達は醜聞の種の觸賣を避けることが出来ないものなんですから、本當の事がすつかり暴露してしまふやうになれば却つて結構です。男爵は姦通罪を犯しました。これだけでも一人で子供を育て上げる資格の無いことは十分ではありませんか？

判事。それには證據がありますか、男爵夫人？

男爵夫人。え、ございますとも、この手紙ですつかり分かります。

判事。(手紙を受取つて)いつ頃のことですか？

男爵夫人。一年前でございます。

判事。言ふまでも無く、これは時効にかゝつて居る、が事實そのものは男爵に對して千斤の重さがある、そして持參金の一部は勿論、全然子供を失ふこと

になる。この罪状の眞實であることを認めますか、男爵？

男爵。はい、悔恨と羞恥とを以つて。けれども罪を軽減さるべき事情がありました。私は禮儀を盡くして、法律が權利として私に容してくれたものを、恩恵として要求しましても、妻の打算的な冷淡によつて、屈辱を忍んで獨居せざるを得ませんでした。私は彼女の愛を買ふのに疲れました、彼女は初めは權力の爲めに彼女の愛を賣り、後には贈物及び金錢の爲めに愛を賣つて、私達の婚姻を穢したのであります。そして最後に私は彼女の直接の同意によつて、餘義なく不正な關係を結ぶやうになつたのであります。

判事。あなたは同意したのですか、男爵夫人？

男爵夫人。いえ、夫は本當ではございません！私は證據を要求致します！

男爵。いや本當だ、けれども證據を擧げることには出来ない、唯一の證人である私の妻が否認するのだから。

判事。證據だてられないものは必ずしも嘘だとは言へない、けれども現行法を侵害したる此の種の契約は、それ自身既に惡契約で病的とされなければならぬ。男爵、萬事がこの通りあなたには不利であります。

男爵夫人。男爵が悔ひ且つ恥ぢて其の罪を白狀したのですから、今被告では無くて原告となつた私は、この上の細かしいことは必要がありませんから、どうぞ判決をお願い申します。

判事。當法廷の司宰者たる本職の權能を以つて、本職は、男爵が辯明、或は少くとも掩飾おほごふて言ふべきことの何たるかを聞きたいと思ふ。

男爵。私は既に姦通の罪状を承認しました、そしてこれは一つは十年間夫婦同棲の後、急に又獨居に返つた時の烈しい必要に迫られた結果であるといふ事、又一つは妻自身の同意を得て爲たことだといふことを酌量すべき事情として陳べて置きました。私は今これは皆な私を陥れようとして企たくらんだ係蹄わな

だつたといふことが分かつて來ましたから、私の義務として息子の爲めには、この上一步も差控えて居るべきでない——

男爵夫人。(本能的に聲を上げる)アクセル!

男爵。婚姻の誓を私に破らせたのは、妻の不貞でありました。

判事。男爵、あなたは男爵夫人が不貞であつたといふ證據を擧げることが出來ますか?

男爵。いゝえ! 私は家名といふことを考へて、すべて手に入れた證據を破毀してしまひました。けれども尙ほ私は、この事に就いては、妻が或時私にしました白狀を守つて居るだらうと敢て信じます。

判事。男爵夫人。あなたはこのやうな罪を承認しますか? その爲めに、當然男爵の心得違ひの原因となつたのですが。

男爵夫人。いゝえ!

判事。あなたは誓つて、この難點に就いては無罪であることを繰返さうとするのですか?

男爵夫人。さうでございます。

男爵。あゝ! どうして、彼女はそんなことをしてはならない! 私の爲めに偽證をしてはならない!

判事。本職は今一度訊問するが、夫人は宣誓をする意志がありますか?

男爵夫人。はい。

男爵。一寸申しますが、今妻は原告のやうに見受けますが、告訴といふものは宣誓の下にされるものぢやございません。

判事。あなたが刑法上の罪で彼女を告訴したのだから彼女は被告である。陪席の諸君はどうお考へですか?

エムマニユエル・ウィックベルヒ。男爵夫人はこの事件の當事者でありますか

ら、自分自身の爲めに證據を擧げるとは許され難いことのやうに考へられます。

スウエン・オスカル・エルリン。私の考へるに、若し男爵夫人が宣誓の下に證據を擧げることになるとすると、男爵も亦その同じ事件に關してさうすることを許可されなければならなくなる。けれども宣誓に對して宣誓はなさるべきものでありませんから、事件全體は依然暗黒の中に残ることになります。アウグスト・エリック・ルース。さやう、そこが何よりも第一に決定されなければならぬ問題ではありませんか？

アクセル・ワルリン。併し法廷の評議は公開ではないから、原被兩造の前では出来ません。

カルル・ヨハン・シヨーベルヒ。陪席判事が自己を表現する権利は秘密といふことによつて制限もされなければ又約束を受けるものではありません。

判事。さういろ／＼の意見があつては、何等の手掛りを得ることが出来ません。併し男爵の罪は證明され、男爵夫人のそれは尙ほ證明されずに残つて居るのであるから、本職は男爵夫人が自分の無罪といふことに宣誓されんことを要求せねばならない。

男爵夫人。畏りました！

判事。いや、一寸お待ちなさい！——男爵、あなたは若し猶豫を與へられたら、あなたの告訴の助けになる證據か證人を提供することが出来ますか？

男爵。それは出来ませんし、又しようとも思ひません、私は私の不名譽が公表されることは望みませんから。

判事。法廷の議事は、本職が教區委員會の委員長と相談する間停止することになります。

階段を降りて右手より退出。

第十場

陪席判事等は各自小聲で相談をする。男爵及び男爵夫人は後方に居る。傍聴人は寄り集まつて喋舌つて居る。

男爵。(男爵夫人に)おまへは偽證することを怖いと思はないんだね?

男爵夫人。子供の爲めですもの、何にも怖いとは思ひません。

男爵。だが若し私の方に證據があつたら?

男爵夫人。でも、あなたはお持ちぢやありませんもの。

男爵。手紙は焼いてしまつたが、保険付の寫はまだ残つて居る。

男爵夫人。嘘仰しやい、私を驚かさうと思つて!

男爵。私がどれだけ子供を愛してゐるか、それをおまへに知らせる爲め、又

私の方は到底駄目のやうだから、子供の母を助ける爲めに、おまへ——おまへに證據書類を上げよう。決して恩を忘れてはいけないよ。

彼女に一束の手紙を渡す。

男爵夫人。あなたが嘘言家だといふことは前から知つてゐましたが、それでも手紙を寫し取つて置くほどの悪黨だとは夢にも思はれませんでした。

男爵。それがお禮の言葉か! が今となつては我々は二人ともおしまひだ。

男爵夫人。さうです、二人で死にませう——さうすれば^{いさかひ}争論もきりが付いてしまひませう。——

男爵。兩親を失ひ、この世にたつた一人ぼつち取残されるのが、子供の爲めに善いことだと思ふかい?

男爵夫人。何んでそんなことになるのですか?

男爵。自分をすべての法律や他の人間以上だと思はせたおまへの馬鹿げた自

惚が、お前をおびき出してこんな喧嘩を始めさせたのだ。そして結局損失を蒙つた唯一たった一人の人は私達の子供さ！ おまへはきつと防禦されるに定まつて居る此の攻撃を始めた時にはどんなことを考へてゐたのだい？ 子供のこと
で無いには定まつて居る。が多分復讐のことだつたらう？ 何の復讐なんだ？
自分の罪を發見されたので其の腹癒けろせだつたのかい？

男爵夫人。子供ですつて？ あなたはこんな下素げすの面前で泥の中へ私を引き
ずり込んでしまつた時、子供のことを思つて居らしゃいましたか？

男爵。ヘレン！——私達は野獸のやうに血まみれになつて搔きむしり合つて
ゐた。私達は私達の零落を見て喜んで居る人々の前に私達の恥辱をさらけ出
した。この室には私達の友人は一人もゐないんだ。私達の子供は今後両親を
立派な人だといふことも出来なくなる、父母の推舉を得て社會へ乗り出すこ
とも出来なくなる、彼は人の寄りつかない家や、人に疎んぜられ輕蔑される兩

親を目のあたりに見るだらう、さうして詰りは彼が私達から逃れ去る時が來
るに違ひない！

男爵夫人。それではどうしようと云ふのです？

男爵。財産を賣拂つてこの國を去らう。

男爵夫人。そして又新たに喧嘩をやり始める！ どんなことになるか私には
分かつてゐますよ、あなたは一週間位はおとなしいでせう、がぢきに又私を
虐待なさるでせう。

男爵。まあ考へて御覽——今あの人達はあそこで私達の運命を定めて居る。
おまへは牧師の口から善いことを聞く望みは無い、おまへはあの人を嘘つき
だと言つたからね。私は又基督教徒で無いといふことが分かつてゐるから、
どの途恩恵に預かる望みは無い。おゝ、森の中にでもゐた方がましだ。さう
すれば大きな樹の根の下に這ひ込むことも出来ようし、又は巖の下へ首を突

込むことも出来よう——堪らえ切れないこの恥辱！

男爵夫人。 牧師さんが私達を憎んでゐらつしやるのは本當です、ですからあなたの仰しやるやうなことが起るかも知れません。どうしてあなたは牧師さんにお話しなさらないのですか？

男爵。 何を話すんだ？ 調停チウテイの事か？

男爵夫人。 間に合ひさへすれば、あなたのお氣に召した事を！ あゝ、間に合ひさへすれば！——あのアレキサンデルツソンと言ふ人は、始終シヨウチュウ中私達に附纏つてゐるがどうしようつて言ふんでせう？ 氣味のわるい人だ！

男爵。 アレキサンデルツソンはいゝ男だよ。

男爵夫人。 さうでせうよ。あなたにはいゝでせうが私にはさうぢやありません——私は以前あの眼付きを見たことがあります——さあ牧師さんの所へ行きますせう、が何より先きに手を取つて下さい——私は怖ろしくなりま

した！

男爵。 何が、おまへ、何が？

男爵夫人。 存じません——すべての物、すべての人間が！

男爵。 私だけはさうぢやなからう？

男爵夫人。 えゝ、今のところだけでは！ 丁度私達の着物が水車の輪に引つかゝつて、身體が機械の中へ引張り込まれたやうなものです。私達は何をしてゐたのですか？ 怒りにまかせて何をしてゐたのですか？ 今男爵と其の夫人とが眞裸まうばだかになつて双方双方殴り合ひつこをしてゐるのを見てゐるあの人は、どんなに欣んで居るでせう——おゝ、私は身にまといほろつきれ襪一枚もなしてこゝにかうして立つてゐるのぢや無いかと思ふくらゐです。

(上衣のボタンをはめる)

男爵。 落ちつきなさい。確かにこゝは私が以前に言つたことをおまへに言

ふべき適當の場所ぢやない、それ、たつた一人の友人と、たつた一つの家庭とがあるばかりだといふことさ——が併し私達はもう一度出直すことが出来るかも知れん！——あゝ！いや／＼、私達にはそれは出来ない。おまへは行過ぎてしまつた。みんなおしまひだ。してこの最後——さうだ、これが最後であればなア！これはすべて他の事の後に來べきものだつた。いや／＼、私達は一生敵同士だ！で若し今私が子供を附けておまへを手離してしまふと、おまへは又結婚をするかも知れない——私にはもうそれが分かつて居る。さうすれば子供は繼父にかゝることになつて、私は私の妻と子供が他人と連れだつて歩いて居るの見なければならなくなる——或ひは私は私で誰れかの妾めかけに腕を借して歩き廻はつて居るかも知れない。いや／＼！おまへか、さうでなければ私か！二人の中でどちらか一人は打倒されなければならぬ！おまへか、私か！

男爵夫人。あなたですよ！若しあなたに子供を渡してしまつたなら、あなたはもう一度結婚するかも知れませんが、そして私は、自分の子供と一緒に私の代りになつてゐる他の婦人を見なければならなくなる。こんなことを思つたゞけでも私は人殺しをしかねますまい。私の子供に繼母が出來ようとは！

男爵。おまへは前にそんな事を考へたことがあつたかも知れない！けれどもおまへは、私が、私といふものをおまへに縛りつけて居る愛の鎖かぎを嚙つて居るのを見た時には、おまへは、私にはおまへ以外のものを愛することは出来ないのだと思つたらう。

男爵夫人。あなたは、私があなを愛したことがあるとお思ひですか？

男爵。さうだ、少くとも一度は、私がおまへに不實であつた時。その時おまへの愛は絶頂に上つた。そしておまへの思はせぶりの輕蔑なまには堪らなくなつてしまつた。併し又私の過失がおまへに私を尊敬させるやうにしてしまつた。

男爵。 いや、私は自分の要求は十分に知つて居る。けれども私には愛憎共に
 間隔がある、今の一分間おまへを愛すると、次の一分間はおまへを憎む。そ
 こで今は丁度おまへを憎んでゐるのだ！
 男爵夫人。 あなたは今子供の事も思つて下さいますか？
 男爵。 あゝ、今も、それからいつでも！ 何故だかおまへには分かつてゐる
 かい？ 畢竟肉體を備へた私達の愛だからさ。彼は私達の美しかつた時の記念
 だ、私達の靈魂を結びつける絆だ、私達がさうしようと思はないでも、結局
 どうしてもそこに會せねばならぬ共通の地點なのだ。私達の離婚が宣告され
 たにしても、どうしても私達の別れられない理由はこれなんだ—— あゝ、
 思ふ通りおまへを憎むことが出来さへすれば！

おまへが一番崇拜してゐるのは男性か罪人かどちらだつたか私は知らない、
 が両方であつたらうと私は考へて居る—— 両方だつたに違ひない、おまへ
 は私が出會した婦人の中では最も代表的婦人だからね。そしてもうおまへは
 私が思ひもかけてゐない新しい細君の事を嫉いて居る。おまへが私の配偶と
 なつたのは不仕合せだ！ 私の妻としておまへの勝利は犯し難いものだらう。
 して又おまへの不貞は唯私の新酒の香のやうなものだつたらう。
 男爵夫人。 なる程、あなたの愛はいつも物質的でした。
 男爵。 すべて精神的なものは物質的で、物質的なものは皆な精神的だよ！ 私
 の感情に力をつけてくれた、おまへに對する私の弱點といふものが、おまへ
 に自分自身を強者だと信じさせた、が實のところおまへは私よりは、野卑で、
 性質が悪くつて、又不埒なんだといふだけのことさ。
 男爵夫人。 ではあなたが強者？ 二分間と續いて一つの物を要求なさらない

第十一場

判事と牧師とは話しながら登場、舞臺の前方に立
留まる。

判事。かういふ次第で私は正義を求め眞理を發見する望が絶対に無いと思ふ
のです。そして法律なるものは私達の正義の觀念よりは二世紀も後れて居る
やうに私には思はれます。無辜のアレキサンデルツソンを罰し、窃盜を犯し
た少女を赦さなければならぬといふのではありませんか？ それから此の
離婚事件に關しては、目下のところ私には全く分かりません、そして判決を
下さすにも自分の良心に頼ることも出来ません。

牧師。けれども判決は下されなければなりません。

判事。私の手によつてでは無く！ 私は此地位を棄て、他に職業を擇ばら

と思ひます。

牧師、なに、そんな不面目な事は評判ばかり高くなつて、あなたの前途の妨
害になりませう。もう二三年續けておやんなさい、さうすれば人間の運命を
つぶしてしまふことは卵の殻よりも樂だと思ふやうになります。そしてあ
の事件に就いては、あなたが責任を免がれたいと思ひなら、陪席判事の投
票を勝たせてやりなさい。さうすれば彼等は自分で責任を負はねばならぬ
ことになります。

判事。それは一方法だ——彼等は實際一つになつて私に反對するだらうと
察してゐます、といふのは私はこの事件に就いては意見を持つてゐました、
それは全く直覺的で、ですから頼みにはならないのですが——どうも御忠
告有りがたうございました。

執行官。(アレキサンデルツソンと話して居たが、判事の方へ進み寄つて)公

の起訴者としての職権を以つて、私は農夫アレキサンデルツソンをスブレン
 ゲル男爵夫人に反対の證人としてこゝに之を報告致します。

判事。 姦通の訴に關係してどうすか？

執行官。 さうです。

判事。 (牧師に) 解決に達するかも知れない新しい手掛かりが見つかりまし
 た。

牧師。 あゝ、あなたが捉まへることさへ出来れば、手掛かりはいくらもあり
 ます。

判事。 併し思へば、嘗ては相愛した二人の人が互に相陥れようとしてゐるの
 を見ようとは恐ろしいことだ。まるで屠殺場に居るやうなものだ！

牧師。 左様、それが愛といふやつです、判事さん！

判事。 では憎といふのは何ですか？

牧師。 それは上衣の裏です。

(判事は向ふへ行つて陪席判事に話をする。)

男爵夫人。 (牧師のところへ進み出て) お助け下さい。牧師さん！ 私達をお
 助け下さい！

牧師。 私には出来ません、僧侶として助けてはなりません。その上私はこん
 な重大な事件をおやりにならないやう注意して上げたぢやございませんか？
 別れるといふことは雑作ざうさも無いことだと思つてゐらしたんでせう！ まあ、
 それではお別れなさい！ 法律は禁じますまい、ですから法律をけなしたり
 なんぞしてはいけませんよ。

第十二場

すべて前場の人々。

判事。これより裁判を繼續します。公の起訴者ウイルベルヒ執行官の報告に従へば、新しい證人が男爵夫人に對して現はれた、そして姦通の廉により夫人の有罪なることを證言せんとして居る。農夫アレキサンデルツソン！

アレキサンデルツソン。とうに控えて居ります。

判事。其の方の陳述をどうして證明することが出来るか？

アレキサンデルツソン。私はその現場を見たのでござります。

男爵夫人。嘘吐き！ 證據を出させて下さい！

アレキサンデルツソン。證據？ 私は今證人になつてゐるんぢやござりませんか？

男爵夫人。おまへがちつとの間證人だなんて言はれたつても、おまへの證言は證據にはなるもんぢやない。
アレキサンデルツソン。すると證人といふものはもう二人の證人が無ければいけないし、其の二人は又他の證人が無ければゐけない、とかういふことになりまますのですか？

男爵夫人。さうですよ、すつかりそれが嘘か嘘でないか、それが分からない時には入用なのですよ。

男爵。アレキサンデルツソンの證據は必要ではありませんまい。どうぞ男爵夫人の不貞といふことをすつかり證明する書簡類を全部この法廷へ提出することを許可して下さい——これが原文です、その寫しは被告が所持して居る筈であります。

(男爵夫人はふと叫聲を揚げたが、すぐこらへる。)

判事。然るに尙、男爵夫人、あなたは今の先き宣誓をなさらうとしてゐられたか？

男爵夫人。けれども私はしませんでした！それでかうなりますと、男爵と私とは對等になれると思ひます。

判事。我々は一方の罪を以て他方の罪を帳消にさせることは不可能である。

各自の計算はそれ／＼別々に取定められなければならない。

男爵夫人。それでは私は男爵が浪費つてしまつた私の持參金に對する請求を直ちに男爵に向つて提出したいと思ひます。

判事。男爵、若しあなたが夫人の持參金を消費してしまつたなら、すぐこの所で其の事件を解決してしまつたが宜からうと思ふ。

男爵。妻は六千クラウンの株券を持つて來ました、それは其の時賣れないもので、ぢきに全く値のしないものになつてしまひました。結婚の當時彼女は

電信技手を務めて居りまして、夫から補助を受けることは望まないと立派に言つて居りましたから、私達は一つの結婚上の約束をしまして、銘々自立して行くことに定めました。けれども彼女は結婚後失職したものですから、それ以來といふものは私が彼女を扶助して來ましたのです。これには私は何等の異議も申しません。が今彼女が勘定書を出したところから、私もそれに應ずる私の方の勘定書を出させて頂かねばなりません。丁度^{しめ}三萬五千クラウンになります、これは結婚の始めからの家事費の三分の一でして、三分の二は自分で負擔しようと思つて居ります。

判事。あなたは此の約束を寫し取つて置きましたか、男爵？

男爵。いえ書取つてございません。

判事。あなたはあなたの持參金の整理を證明すべき何か書類をお持ちですか、男爵夫人？

男爵夫人。私は名譽を重んずる人と交渉するのだからと思つて、其の當時は書付けて置く必要があらうとは思ひませんでした。
 判事。それではこの問題は全部こゝで議するわけに行きません。陪席判事諸君はどうかこの事件の討議及び判決作製の爲めに小さい方の法廷へお出でを願ひます。

第十三場

陪席判事と判事とは右手から出て行く。

アレキサンデルツツン。(執行官に)この裁判は一向私には分かりません。
 執行官。すぐ家へ歸つた方がおまへさんの爲だらうと思ふよ、さうでないとも
 マリエスタッドの百姓のやうな目に會ふかも知れないよ。おまへさん其の話

を聞いたかい？
 アレキサンデルツツン。いゝえ。
 執行官。かうなんだ、その男は法廷へ傍聴に出かけたところが、其の事件の證人として引張り出されて、その一方の仲間に入れられて、とう／＼折檻柱で打たれたといふことだよ。
 アレキサンデルツツン。おゝ、おツかない！併し私はある人等のあの事は本當だと思つてゐます！あの人等の事なら何でも本當だと思つてゐます！
 (出て行く。)
 男爵は舞臺の前方男爵夫人の方へ行く。
 男爵夫人。あなたは私の傍へ來ないぢやゐられないんですか。
 男爵。今私はおまへを打ちのめしてしまつた、そして自分も血まみれになつて死にかゝつて居る、といふのはおまへの血は即ち私のだからね――

男爵夫人。まああなたは勘定書を拵へることがお上手ねえ！

男爵。反訴といふことになつた場合だけはね！ おまへの勇氣は絶望からで、死刑の宣告を受けた人の勇氣そのまゝだ。そしておまへはこゝを去れば墮落してしまふよ。さうすればおまへは悲も罪も私におつ付けることは出来なくなつて、後悔に苦しみさいなまれることだらう。おまへは私がどうしておまへを殺さなかつたか知つてゐるかい？

男爵夫人。あなたが思ひきつてなさらなかつたからですよ！

男爵。いや〜！ 地獄の事を考へたつて私は思ひ留まるもんでなかつた——私は地獄なんて信じないのだからね。が併しそれはかういふ考からだつたのだ、假令おまへが子供を引取ることになつても、おまへは五年たゝぬ中に死んでしまふから、といふ考なのさ。これは醫師が私に言つたことなんだ。そこで子供は父も無く母も無しに取残される。考へて御覽——この世の中に

たつた獨りぼつちになつて！

男爵夫人。五年ですつて！——それは嘘です！

男爵。五年の中に！ そこで私はお前の氣に入らうが入るまいが子供と一緒に後に残されることになる。

男爵夫人。おゝいけない！ その時こそは私の遺族の者が子供を取り返へす爲めに訴へるでせう。私は死んでも死なない！

男爵。悪事は決して死なない！ それはその通りだ！ 併しどういふ譯だか言つて御覽、おまへが私を子供から遠ざけ、又子供を、子供がなつてゐる私から隔てようとするのは？ 全くの悪意かね——子供を罰して復讐をしたといふ一念からかね？ (男爵夫人は黙つたまゝ居る) おまへは知つてゐるかい、私は、或はおまへが子供の親子關係に就いて疑つて居るのかも知れないと思ふといふことや、私の幸福が間違つた基礎の上に打建てられてはいけな

いといふことから、その點でおまへが私に子供を渡さないのぢや無いかといふやうなことを牧師に言つた。さうすると牧師が言ふには、「いや、私は彼女にそんなことが出来ようとは思はん——そんな氣の利いた考を起すことは出来ない」——私はおまへが何んでこの一事に熱狂してゐるのか自分にも分かつてゐるとは思はん、が、おまへが執つて動かぬやうに、おまへに刺激を與へるものは生存を續けたいといふ渴望だよ。私達の子供はおまへの肉體を承けて居るが靈魂は私を持つてゐる、おまへはあの子から其の靈魂を離すことは出来ない。おまへが思ひもつかぬ時に、あの子の中に私が戻つて居るのに氣がつくだらう、あの子の中に私の思想や私の趣味や私の情慾を見つげ出すだらうよ、そしてこんな理由からして、おまへは、いつかあの子を憎むやうになるだらう、丁度今おまへが私を憎んでゐるやうにね。私の心配してゐるのはこゝなんだよ！

男爵夫人。あなたは、まだあの子が私のものにならうも知れないと思つて少々御心配のやうですね？

男爵。母として又女としてのおまへの資格の中に、おまへは私達の裁判官に對しては私より有利な或るものを持つて居る、けれども假令正義が眼を蔽はれて骰子さいころを振らうとも、どの骰子にも一方に先行權のあることには變りが無いものだ。

男爵夫人。あなたは、いざお別れといふ時にはどう挨拶して宜いものだから御存じてせう。多分あなたは、お見せかけになるほどわたしを憎んでゐらつしやりはしますまい？

男爵。打ちあけて言へば、私は自分の不面目、それにおまへが關係してゐるよ。うとも、その不面目を憎むほどおまへを憎んではゐないと思つてゐるよ。それなら何故このやうに憎むのか？ といふに、これは多分、私は、おまへが

四十歳近くなつて、男性的要素がおまへに現はれて来たといふことを氣付かずにおいた、で多分、私が、おまへの接吻にも、おまへの抱擁にも氣付いて来たのがこの要素なんだ——多分それが私の非常に忌み嫌つてゐるものだらうと思ふんだ。

男爵夫人。多分さうでせう。なぜと言へば私の生涯の悲しみといふのは、御承知の通り、私が男に生れて來なかつたといふことなんですからね。

男爵。多分それが私の生涯の悲しみになつたのだ！ それで今おまへはおまへを弄んだ自然に對して復讐をしようとしてゐる、即ちおまへはおまへの息子を女子として育てたいと思つてゐるのだ。ところで、おまへは私に一つの事を約束してくれるだらうね？

男爵夫人。あなたこそ私に一つの事を約束して下さいさるでせうね？

男爵。約束したつて何の役に立つかい？

男爵夫人。いゝえ、もう約束なんてよしませう。

男爵。おまへは本當に私の問ふことに答へてくれるだらうね？

男爵夫人。私が本當の事を言つても、あなたは嘘だと思ひでせう。

男爵。さうだ、さうあるべきだ！

男爵夫人。もう萬事が永久に終つてしまつたといふことがお分かりになりますか？

男爵。永久に！ 曾て私達が互に愛を誓つたのは永久にといふことだつた。

男爵夫人。そんな誓言を言ひ出すなんてあんまりですわ！

男爵。何故あんまりだ？ 事實ある通り、それはいつでも羈絆だ。

男爵夫人。私はどうしても桎梏には堪へられませんでした！

男爵。おまへは私達が一緒に縛られなかつたらよかつたと思ひかい？

男爵夫人。さうです、私にとつては宜かつたでせう。

男爵。これは不思議だ。それではおまへが私を縛りつけることが出来なかつた筈だ。

男爵夫人。してあなたも私をね。

男爵。そして結果は同じことになつたらう——丁度分數を約する時と同じやうに。それだから、法律の誤でも無い、私達も又間違つてゐない、他の何人も間違つてゐない、といふ事になる。がそれでゐて責任を負はなければならぬのは私達だ！（執行官近よる）なるほど！ 今判決が言渡される——

さよなら、ヘレン！

男爵夫人。さようなら—— アクセル！

男爵。別れるといふことはつらい！ と言つて同棲はむつかしい。けれども少くとも争論いざかひはもう済んだ！

男爵夫人。さうならばねえ！ 私はこれから始まるんぢやないかと心配して

ゐますよ。

執行官。双方共裁判が開かれてゐる間は退場して下さい。

男爵夫人。アクセル、手遅れにならないうちに一言だけ！ 結局はあの人達

が、私達から子供を取り上げてしまふかも知れません。ですから馬車で家へ歸つて、あなたの阿母おつかさんのところへ子供を連れて行つて下さい、それから私達はこゝから、ずっと遠方へ逃げませう！

男爵。おまへは又私をなま驅らうとしてゐるんだね。

男爵夫人。いえ、さうぢやありません。私はもうくゝあなたの事も、自分のことも、私の復讐のことも思つてはゐません。たゞ子供だけは助けて下さい！ ね、分かりましたか、アクセル——是非さうして下さい！

男爵。よろしい。けれども若し私をなま諛すのだつたら—— かまはん、私はさうしよう！

急いで出て行く。男爵夫人は後方の扉口から去る。

第十四場

陪席判事及び判事登場、著席。

判事。我々は既に完全にこの事件を目前に控えて居るに就いては、本職は判決の下さるゝ以前に於いて陪審判事諸君が各自別々に其の意見を陳述されんことを望む。個人としては、私は原被兩造共に等しく難すべき缺點あり、且つ母は父よりも子供の養育に適當するものと爲さねばならぬ故に、子供を母に與ふるが理の當然であると考へられるのであります。(沈黙。)

アレキサンデル・エクルンド。現行法に従へば、階級及び位地なるものは、夫より妻の受くべきものにして妻より夫の受くべきものではありません。

エムマニユエル・ウィックベルヒ。而して夫は妻の適當なる保護者であります。

カルル・ヨハン・シヨトベルヒ。結婚に結合力を與ふところの儀式には、妻は其の夫に服従すべきものであると言つてあります、かるが故に男子をして女子よりも先行權を得せしむべきは明白だと思はれます。

エリック・オットー・ポーマン。且つ又子供等は父の信仰に従つて育てられなければなりません。

アーレンフリッド・ソーアルベルヒ。その點からして子供は父に従ひ、母に従ふべきもので無いと結論することが出来ます。

ウィックのオロフ・アンデルツソン。併しながら我々の前に置かれた事件に於ては、男女共に等しく有罪であつて、而して現はれた點より判断すれば、等しく又子供を養育するに不適當である故に、私は子供は宜しく兩人の手より

引離すべきものであると考へます。

ベルガのカルル・ペーテル・アンデルツソン。オロフ・アンデルツソンの説に賛成して、私は、かゝる場合に於いては、法廷は子供及び財産の保護者として二名の善良なる人を指名して、その人々よりして夫及び妻は子供と同様補助を受け得るやうにすべきだと思ひます。

アクセル・ワルリン。而して其保護者として私は此の場合アレキサンデル・エクルンド及びアーレンフリッド・ソーデルベルヒを推舉したいと思ひます、兩君共正直なる性格であり基督教氣質であることは普く知れ渡つて居ります。アンデルス・エリツク・ルース。私は子供を兩親から引離すに就いてはウイツクのオロフ・アンデルツソンに賛成し、保護者に關してはアクセル・ワルリンに賛成します、この保護者の基督教氣質は彼をして子供を養育するに特に適任者たらしむるものであります。

スウエン・オスカル・エルリング。只今陳べられた説に賛成致します。

アウグスト・アレキサンデル・ヴァス。賛成。

ルードウイツヒ・オストマン。賛成。

判事。陪席判事諸君の多數によつて陳述された意見は私の意見と反對でありますから、これに關して諸君の投票を乞はねばなりません。そこで先づオロフ・アンデルツソンの動議にかゝる、子供を兩親から引離すといふ事及び保護者の任命といふことを始めにするのが適當と考へます。此の處分を採るといふことは諸君の一致の意見でありますか？

陪席判事一同。さうであります。

判事。若しこの動議に異議のある方は手を舉げて下さい。(沈黙)陪席判事諸君の意見は私の意見に勝ちました。そこで私は、判決に就いて無用の殘酷と思はれるものに對しては、覺え書に除外例を入れようと思ひます——それ

では夫婦は一年間寢室及び居住の隔離に處し、若しその期間中互に相逢ふに於いては禁錮の處分を受くべきものとして宣告を下すことに致します。(執行官に)双方を呼び出しなさい。

第十五場

男爵夫人及び傍聽人登場。

判事。スプレングル男爵は出廷しないのですか？

男爵夫人。男爵はすぐまゐるでございませう。

判事。時間を守らないものは何人に論無く、自らを非難しなければならぬ。州裁判所の判決は次の通りである。夫及び妻は一年間寢室及び住居を離隔するやう宣告されたる事、子供は之を兩親より取上げ、其の教育に關しては二

人の保護者の監督の下に置かるゝ事。この目的の爲めに法廷は陪席判事アレキサンデル・エクルンド及びアーレンフリッド・ソーデルベルヒを選んで之れに任命した。

男爵夫人は泣き出して床の上にくづをれる。執行官及び巡査は彼女を助け起こして椅子につかせる。傍聽人の幾人かは其の間に出去る。

男爵。(登場して)閣下！私は外に居まして判決を聞きました、それで私は忌避したいと思ひます、第一には個人として私の敵である人々から成立つて居る陪審官全體に對して、夫から第二には保護者であるアレキサンデル・エクルンド及びアーレンフリッド・ソーデルベルヒに對して、この兩人は何れも保護者に必要なる經濟上の資格を持つて居りません。その上私は、其の職務の運用に於いて判事が示した無能といふことに就いて判事に對して訴訟を提起します、彼は或る一人の第一の罪が其の結果として他の者の第二の罪を

招くものであるといふこと、それ故に両者は同等の責を負ふべきもので無いといふことを認めることが出来なかつたのです。

判事。判決に不服な人は何人でも法律によつて規定された期限内に上級裁判に訴へて宜しい。陪席判事諸君は、自治體顧問に對して審問中の事件に關聯して、牧師邸訪問に御同行を願ひたいと思ひます。
判事及び陪席判事は後方の扉口より去る。

第十六場

男爵及び男爵夫人。傍聽人は次第に退場。

男爵夫人。エミールは何處にぬますか？

男爵。行つてしまつたよ！

男爵夫人。それは嘘です！

男爵。(間)さうだ——私は信用の出来ない阿母さんのところへはあの子を連れて行かなかつた、けれども牧師の役宅へ連れて行つたのだよ。

男爵夫人。牧師のところへですつて！

男爵。おまへの唯一の頼みになる敵だよ！ さうだ。信用の出来る人が外に誰があらう？ そして又さうした譯は、つい今の先き、私は或はおまへが子供を殺して自分でも死ぬのでは無いかと思はれるやうな、おまへの目付を見たらからなんだよ。

男爵夫人。お氣づきてしたか！——お、どうして私はあなたを信用して、

自分で自分を馬鹿にするのでせう。

男爵。なに、おまへは何事を言ふのだい？

男爵夫人。存じません。私はもう、打たれても感じが無いくらい疲れてゐ

ます。一突きに突殺されたら助かるやうに思はれるくらゐです。

男爵。 おまへはこれからどんな事が始まるのだか考へても見ないんだね。おまへの息子はどんな風に二人の百姓に育てられようとして居るのだか、あの男達の無智文盲や野卑な習慣はぢり／＼に子供を苦しめて殺してましふだらう。又どんなにして子供は彼等の狭苦しい社會に押し込められようとしてゐるのだらう。どんなにして子供の智慧は迷信に壓さへつけられようとしてゐるのだらう。どんなにして子供は其の父や母を輕蔑するやうに教へこまれようとしてゐるのだらう——

男爵夫人。 お黙んなさい！ もう何んにも言はないで下さい、さうで無いと私は氣が狂ひさうです！ 私のエミールが百姓の女の手で育てられる、自分を洗ふことも碌々知らないあの女の手で、寢床は蚤や虱だらけのあの女の手で、櫛さへさつばりして置くことも出来ないあの女の手で！ 私のエミール

ルや！ いや／＼、そんな事があるものか！

男爵。 それは全く事實なんだ、そしておまへは誰を恨まうやうも無い、唯自分を責めるより外に仕方が無い。

男爵夫人。 自分をですつて？ しかし私は自分で自分を作つたのでせうか？ 私は自分で自分に悪い癖や、憎惡の念や荒々しい感情を備へつけたのでせうか？ さうでは無い！ こんないろ／＼な物に敵對する力や意志を拒んで私に授けてくれなかつたのは誰だつたのでせう？—— 今といふ今自分の事を思ふと、ほんとうに私は哀れな情なさけないものでございます。さうではございませんか？

男爵。 さうだ、おまへは可哀さうだ！ 私達二人も可哀さうなものだ。私達は夫として又妻として結婚せずに暮らすとによつて、結婚といふものを取圍んで居る岩石を避けようとした、がそれにもかゝはらず私達は争論いさかひをした、

そして私達同胞の尊敬といふ、人生の最大なる歡樂の一を犠牲にして居た！
 — ところで私達は結婚したのだ。併し私達は社會團體及び其の法則の一境地を盗む必要があつた。私達は何等宗教的儀式を欲しなかつた、がその代りにぐずぐずに自由結婚になつてしまつた。私達はお互に頼りにしようとは思はなかつた—— 私達は紙入を共通にしようとしなかつたし、又銘々の所有權を主張しようとしなかつた—— ところで又私達は舊の習慣に落ち込んでしまつたのだ。結婚式は擧げず、併し結婚の契約だけ！ ところがそれが粉微塵になつてしまつた。私はおまへの不實を許して、唯子供の爲めばかりに任意に別れぐに同棲してゐた——それが自由といふものだ！ けれども私は友人の妾を私の妻だと言つて人に引合せるのには厭きぐしてしまつた—— ところで私達は離婚をしなければならなくなつたのさ。おまへには推量が付くかい——私達が争つてゐたのは誰れとなんだかおまへには分かつてゐる

かい？ おまへはその者を神だといふだらうが、私はそれを自然だと言ふよ。
 私達を憎み合ふやう煽り立てたのは其の大將なんだ、丁度戀する人達を煽り立てるやうにね。で今私達は生命の火花の續く限りはお互に引掻き合はなければならぬ運命になつてゐるのだ。控訴の新しい手續、裁判のやり直し、教區委員會の報告、牧師會の意見、それから大審院の判決。それから次いで来るものは檢事總長への私の愁訴、保護者として自分を申請すること、それに對するおまへの反對及び反訴、詰りはいたちごつこだ。財産の不始末、破産、ぞんざいな子供の教育！ 私達は何故この二つの慘な人間に終末を與へないのだ？ それは子供が私達の手を止めるからだ。おまへは泣いて居る、が私には泣けない！ 私の心が、先き走りをして、荒れすさんでゐる家で私を待ち受けてゐる夜の事に思ひ至つても泣くことさへ出來ない！ そして可哀さうに、おまへはおまへの阿母さんの所へ歸らなければならぬ！ おま

へが自分自身の家庭を拵へようと思つてあんなに意氣込んで振り捨てゝ来た
阿母さんなんだ。もう一度その人の娘になるといふ事——或はそれは人の
妻であるよりも悪いことにならうも知れない！ 一年！ 二年！ 幾十年！
この上幾年私達はこの苦しみを堪え忍ぶことが出来ると思ひかい？

男爵夫人。私は阿母さんの所へはどうあつても行きますまい。どうあつて
も！ 私は大道へ出かけて行つて、それから大聲を掲げて泣けるやうな隠れ
場所の見付かるやうに森の中へ入つて行きませう——私達人間を苦しめさ
いなむ爲めに、世の中へ此の悪魔のやうな愛といふものを置いて行つた神に
向つて思ふ存分わめき立てませう——そして夜になつたら牧師の納屋に雨
宿りをさせよう、せめて私の子供の近くに眠れるやうに。

男爵。おまへは今夜眠りたいといふのだね——あの、おまへが？

幕

大正三年八月十七日發行

(定價金拾錢)
(郵税金本錢)

ア カ ギ 叢 書
第 卅 六 篇
紳

著者 島田青峯
發行者 赤城正藏
印刷者 中田福三郎
印刷所 秀英舎第一工場

東京市麹町區三番町五〇
東京牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發兌元
賣捌所

赤城正藏

全國各書林

東京市麹町區三番町五〇
電話番町二二八〇番
郵便口座東京一〇四三二

の本日

□□□
□□□
□□□
□□□

ムラクレ

書叢ギカア
特色

□□□
□□□
□□□
□□□

○紳士の標準智識○

1. 古今東西の科學藝文中 紳士の標準智識たるべきものを採取し解説せり
2. 従前の刊行物の高價、尨大、難澁なるが爲めに當然辨知し置くべき著述なるにも關せず止むを得ず閑却せられたるもの多きを憂ひ専ら廉價、平易、簡明に解説し刊行せり
3. 内外の傑作の紹介は簡單にコンデンスしたりと雖妙味に到つては毫も減殺する所なし

○世界學術の叢淵○

◀也錢拾金 僅に 册各▶

●**アカギ叢書**●

毎月數篇
逐次刊行

(定價金拾錢
郵稅各貳錢)

○第一編

歐洲文藝 村上靜人原作

人形の家 (ハラ名)

○第二編

哲學叢話 中島文學士編

プラグマチズム

○第三編

歐洲文藝 ダヌンチオ原作
日野月文學士編

廢都 (劇に現はれたる女性改題)

○第四編

社會學 葛西文學士原作
ルボン原譯

群衆心理 (上卷)

○第五編

歐洲文藝 ドストイェフスキイ原作

痴人

○第六編

歐洲文藝 村上靜人著

キウエトデと其著作

○第七編

哲學叢話 三浦文學士篇

ベルグソンの哲學

○第八編

歐洲文藝
オスカア・ウワイルド
村上 靜 人 譯

サロメ

○第九編

哲學叢話
中島文學士編

オイケンの哲學

○第十編

博物叢話
寺尾理學士編

イダンのウ進化論

○第十一編

日本史
龍居文學士著

文政化江戸の世態

○第十二編

歐洲文藝
フライタツハ原
齋藤文學士編

喜劇新聞記者

○第十三編

歐洲文藝
スチゲンソン原
齋藤文學士編

壺の鬼

○第十四編

歐洲文藝
トルストイ原
村上 靜 人 編

復活

○第十五編

歐洲文藝
(絶版發賣禁止)

レディースマン(一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百)

○第十六編

美術叢話
佐々木文學士著

奈良の美術

○第十七編

歐洲文藝
モトバツサン原
村上 靜 人 編

女の一生

○第十八編

歐洲文藝
メーテルリンク原
村上 靜 人 編

モンナ、ヴァンナ

○第十九編

日本史
龍居文學士著

日本建築史要

○第二十編

社會學叢話
ル・ボアソン原
葛西又次郎譯

群衆心理(下卷)

○第二十一編

美術叢話
桑山文學士編

支那の美術

○第二十二編

歐洲文藝
板垣文學士編

ワンダー、ブツク

○第二十三編

歐洲文藝
ストリンドベルヒ
村上 靜 人 編

父

○第二十四編

歐洲文藝
沙村 靜 翁
村上 靜 人 編

ハムレット

○第二十五編

歐洲文藝
ダヌンチオ
日野月文學士編

全訳 ジョバンニ(上卷)

○第廿六編 歐洲全 ▲全ジヨバンニ(下卷) ▼

○第廿七編 歐洲村上静人編 ▲神曲 ▼

○第廿八編 日本龍居文學士著 ▲鎌倉の史話 ▼

○第廿九編 歐洲板垣文學士編 ▲ユーデット ▼

○第卅編 歐洲ピエトロ・コッサー編 ▲皇帝ネロ ▼

○第卅一編 禮節獨逸大使館員著 ▲歐洲禮節 ▼

○第卅二編 歐洲村上静人編 ▲海の夫々人 ▼

○第卅三編 宗教東北大學講師正編 ▲オイケンの宗教思想 ▼

○第卅四編 地理マルコポーロ原作 ▲東方見聞録 ▼

○第卅五編 歐洲葛西文學士原著 ▲モーパッサン論附ドストイエフスキイ ▼

○第卅六編 歐洲島田青峯編 ▲絆 ▼

○第卅七編 歐洲村上静人編 ▲暗の力 ▼

○第卅八編 歐洲島田青峯編 ▲武器と人(チヨコレツト兵隊) ▼

○第卅九編 歐洲村上静人編 ▲鴨 ▼

○第四十編 歴史小文林愛雄著 ▲神話と傳説 ▼

○第四十一編 歐洲葛西文學士編 ▲マダダ(故郷) ▼

○第四十二編 歐洲加藤朝鳥編 ▲虐げられし人々(上卷) ▼

○第四十三編 歐洲栗原文學士編 ▲初戀 ▼

L17
966

- 第四十四編 演藝叢談 小林 愛雄 著 士 ▲ 西洋演劇史 ▼
- 第四十五編 歐洲文藝 フロオベル 原作 焯 文學士 編作 ▲ サラマンボイ ▼
- 第四十六編 音樂叢話 小山 文學士 著 ▲ 日本淨瑠璃史 ▼
- 第四十七編 歐洲文藝 モーパッサン 原作 半田 文學士 編作 ▲ ピエール・と・ジアン ▼
- 第四十八編 歐洲文藝 ダヌンチオ 原作 日野 文學士 編作 ▲ 死の勝利 ▼
- 第四十九編 歐洲文藝 シェンクウィツチ 作 桑山 文學士 編 ▲ 何處へ行くと罰 ▼
- 第五十編 歐洲文藝 ドストイェフスキイ 編 大井 文學士 編 ▲ 罪 と 罰 ▼
- 第五十一編 歐洲文藝 ドオデ 編 黒田 文學士 編 ▲ サ フ オ ▼

● 頌布部數數十萬を越へたる 赤城叢書既刊目錄 ●

終

